

ありがとう

と、思っていない
わけではない。
ためているのだ。

HEART LINE BOOK 2006

万年筆の本



ハートライン プロジェクト事務局

代表 赤堀正俊

北川雄也（アサツー ディ・ケイ）

染谷栄一（アサツー ディ・ケイ）

殿村良彦（アサツー ディ・ケイ）

斉藤祐一郎（GALA[gala] PRODUCE）

藤原宏隆（キッズコーポレーション）

森北菜摘（キッズコーポレーション）

守屋知恵（宣伝会議）

吉田和彦（宣伝会議）

<http://www.heartline.jp/>

Heart Line Book 2006 万年筆の本

ありがとうと、思っていないわけではない。ためているのだ。

2005年12月8日 初版発行

編集 宣伝会議

企画協力 ハートライン プロジェクト

アートディレクション 副田高行

デザイン 貝塚智子・伏屋雅美

発行者 東英弥

発行所 株式会社宣伝会議

〒107-8550

東京都港区南青山3-13-16

03-3475-3031（販売）

03-3475-3033（編集）

<http://www.sendenkaigi.com/>

印刷・製本 大日本印刷株式会社

ISBN4-88335-143-2

©SENDENKAIGI 2005 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

本書の一部または全部の複写（コピー）・複製・転記載

および磁気などの記録媒体への入力などは、著作権法上での

例外を除き、禁じます。これらの許諾については、

弊社までと照会ください。

Heart Line Book 2006 万年筆の本

ありがとうと、思っていないわけではない。ためているのだ。

目次

04 はじめに

06 1章 PEN LIFE

08 稲本響「いいピアノと、いいペンと」

10 片岡京子「柔らかな大人の女性」

12 田川欣哉「アイデア発生装置」

14 田中逸齋「素の自分に戻る瞬間」

16 原田則枝「文字は時間を超える」

18 マイク・エーブルソン「The Pen is the Hand」

20 三宅藤九郎「革新への橋がかり」

22 2章 PEN PERSON

24 「Heart Line Award」について

25 選考委員長 石川次郎「ありがとう」は魔法の言葉

26 雨宮塔子からのありがとう

28 伊藤緋紗子からのありがとう

30 猪瀬直樹からのありがとう

32 木滑良久からのありがとう

34 杉本彩からのありがとう

36 森泉からのありがとう

38 3章 PEN MESSAGE

- 40 「Heart Line Prize」について
- 41 審査員 眞木準「オークン・チュラーン」
- 42 メッセージ部門（最優秀賞／入選／ほか）
- 57 ポストカード・デザイン部門（最優秀賞／入選）
- 62 ポストカード・フォト部門（最優秀賞／入選）
- 67 審査員特別賞
- 68 企業広告部門（最優秀賞／入選）
- 74 特別寄稿 石田衣良「十一本目の贅沢な指」

76 4章 PEN STORY

- 78 インクブルーのありがとう～^{ペンナ}万年筆にまつわる物語～

- 104 おわりに

はじめに

ここ数年、万年筆の人气が再び高まってきています。

日本に最初の万年筆ブームが起こったのは、経済が飛躍的な発展を遂げた高度成長期の頃でした。当時の万年筆はビジネスマンにとってのステイタスシンボルであり、知的さや重厚さへの憧れを表すものであったように思います。しかし現代の人々が万年筆に求めるものは、それとは少し違っています。万年筆を使ってみた人たちが魅力を感じるのは、そのペンで文字を書くことによって生まれる“豊かな時間”と“心のゆとり”。スローライフ、スローフードといった言葉がクローズアップされる現代に必要なのは、猛スピードで走り続けてきた時代に見失ってしまった、人としての本来の速度や心の機微をもう一度見直し、取り戻すことなのかもしれません。

またパソコンや携帯電話などのデジタル機器が急速に発展する現代では、万年筆による“手書き文字”の面白さも大きな魅力として捉えられています。万年筆は、ポーカフェイスな一律の文字を決して書かせてはくれません。次の文字を迷ったときにはそのためらいが、一気にペンを走らせたときにはその勢いが、インクの軌跡となって紙の上に表れます。それが手紙なら、きっと言葉以上の気持ちが相手に伝わることでしょう。ですから万年筆の手紙をもらった人たちからは、よくこんな言葉が聞かれます。「万年筆で書かれた手紙は捨てられない」と。

人は誰もが、大切な人とのつながりを大切にしたいと願っています。

そして確かなつながりがそこにあることを実感するために、自らの心を相手に伝えたいと思っています。

そんな思いをあたたく育て、大切な人たちとともに生きている

この“時間”をより豊かなものにしていきたいとの考えから、

2004年、ハートライン プロジェクトは生まれました。

2年目を迎えたハートライン プロジェクトの今年度のテーマは「ありがとう」。

本書『Heart Line Book 2006』では、万年筆を活用している人たちへのインタビューや万年筆の基礎知識を盛り込んだショートストーリーなどを通して万年筆の魅力を探るとともに、

Heart Line Award および Heart Line Prizeの受賞者たちが綴った

「ありがとう」をテーマにしたメッセージや入賞作品の数々をご紹介します。

たくさんの「ありがとう」が紡ぎ出す、心の軌跡=Heart Line を

ぜひ、あなたも辿ってみてください。

2005年12月

ハートライン プロジェクト

1 章

PEN LIFE

人の生き方は、その人の時間の過ごし方に似ています。

手書きの文字が一人一人の魅力を表現するように
万年筆で綴られる生き方もまた魅力的なのです。

稲本響「いいピアノと、いいペンと」

片岡京子「柔らかな大人の女性」

田川欣哉「アイデア発生装置」

田中逸齋「素の自分に戻る瞬間」

原田則枝「文字は時間を超える」

マイク・エーブルソン「The Pen is the Hand」

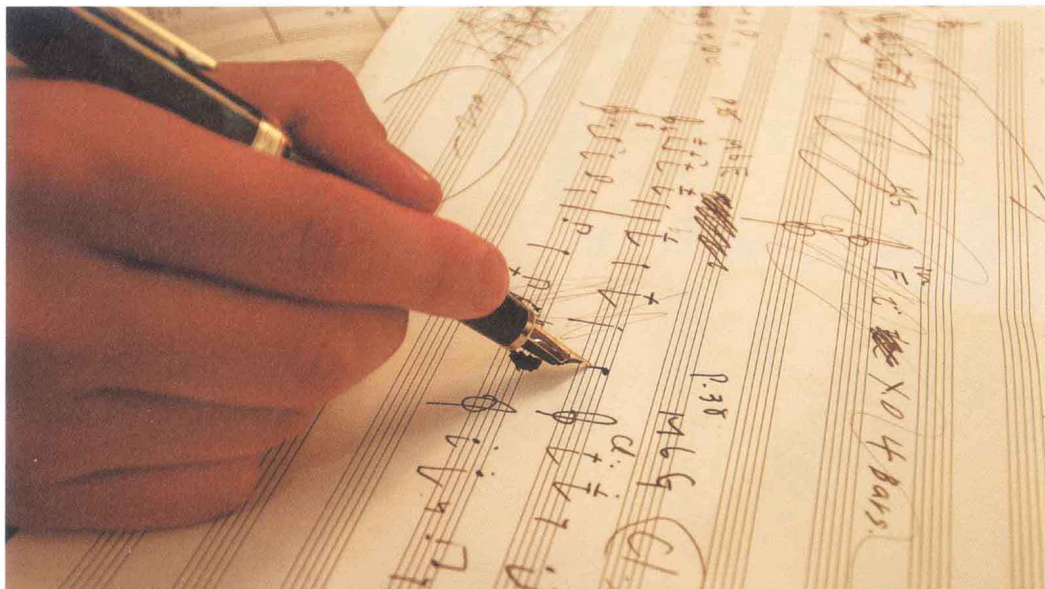
三宅藤九郎「革新への橋がかり」



いいピアノと、いいペンと 稲本 響

いま使っているセーラーの万年筆は、友人とふたりで万年筆専門店へ行ったときに手に入れたものです。それまで僕は万年筆に対して“書きにくいペン”という印象しか持っていなかったの、その書き心地のよさにびっくりしました。まるで“いいピアノ”に出会ったときのような感動がありましたね。指に吸いつくようにフィットして思い通りの線がすっと書ける、その感触は、ピアノと自分が一体となって演奏しているときの感覚に通ずるものがあります。僕は演奏会の前などには必ず鍵盤の重さを自分に合うように調節するんですが、手を使う仕事をしている人間にとって“タッチ”というのはそのくらい重要な要素なんです。

ただ当初は、本当にこれで楽譜が書けるんだろうか、という不安も少しありました。というのも僕は作曲するときに書いたり消したりを何度も繰り返すので、それまではシャープペンと消しゴムを使っていたんです。だから万年筆だと一度書いたものを消すのが面倒そうだな、と思ったんですが、店のオーナーに「万年筆で書いたものは修正液などで消さないのが基本」と言われて、とりあえずその流儀に習ってみることにしました。それからの僕の楽譜は、ペンで書いた音符をまたペンでぐちゃぐちゃっと消す、そんな部分のオンパレード（笑）。でも、これが逆にいいんですよ。書いたときの気分や葛藤がそのまま残るので、作った曲をどう



演奏すべきかと考える時の手がかりになるし、セッションするときのメンバーにもニュアンスがよく伝わる。楽譜にライブ感があるので、どこをどう演奏してほしいと言葉で伝えるなくてもわかってもらえるんですね。ですから一緒に演奏するメンバーには、たいてい清書もしていない手書きの楽譜を渡してしまいます。言葉で説明するよりも万年筆の楽譜の方が、ずっと雄弁に曲を語ってくれますから。

万年筆を使っているとどうしてもインクで手が汚れますが、それもまたいい感じ。仕事したなあ、という実感を持てます（笑）。作曲する前には意識して自分のなかのスイッチを切り替える必要があるので、僕の場合“始める”までが結構大変なんですけど、このペンを持っただけからは以前よりもスムーズに作曲モードに入れ

るようになりました。ピアノに向かう前に万年筆のインクを入れる、その数分間に精神的な準備が整うという感じです。また曲に詰まったときなど、いいタイミングでインクが切れたりもするので、そんなときには補充の作業も気分転換になりますね。ですから僕にとっての万年筆は、仕事の前に「さあ、始めようぜ」と気合いを入れてくれて、煮詰まると「ちょっと休もうか」と声をかけてくれる、気の合う相棒のような存在。もうコイツなしでは始まらない、というくらいのもस्टアイテムになっています。

稲本響（いなもと・ひびき）

ピアニスト・作曲家。名器：ニューヨークスタインウェイを各会場に持ち運んでの演奏スタイルを持つ。舞台「海の上のピアニスト」では作曲と演奏を担当し市村正親とセッションを行った。ベルリンフィルのメンバーとのクラシック・自作曲の共演、映画、テレビの音楽も手がける。



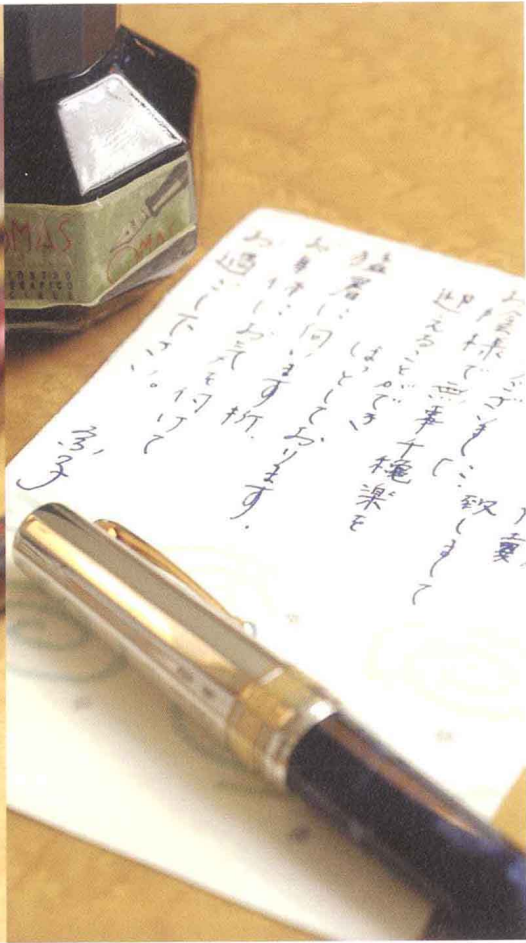
柔らかな大人の女性

ボールペンなどの筆記具とは違う、特別な“ペン”と初めて出会ったのは小学校5年生の頃でした。当時通っていた英語教室の先生が「これで練習すると綺麗な筆記体を書けるようになるから」と“付けペン”で文字を書くことを推奨していたんです。インクボトルにペン先を付けながらカリカリと文字を書いていくそのペンは、子供だった私にとっては決して使いやすい筆記具ではありませんでしたが、なんだか大人になったような気分で嬉しかったですね。当時よく読んでいた『ベルサイユのばら』の登場人物を気取って、英語の課題だけでなく普通の手紙やメモなどもそれで書いていました。

片岡 京子

私にとって万年筆というのは、いつもある種の憧れとともにあるんです。大学生の頃には、作家の森瑶子さんがモンブランで原稿を書いているというのを何かで読んで、すごく憧れました。記事に付いている写真を見ては「かっこいいなあ、大人の女性って感じだなあ」とため息をついていましたね。柔らかく歳を重ねて豊潤な魅力を放つ、そんな女性をイメージさせるファッショナブルな筆記具が万年筆だという気がします。

私がいま使っている万年筆は2本で、ケース一体型のウォーターマンは舞台を見にきてくださったファンの方にいただいたもの。持っていた手帳と色がぴったりだったので、以来ずっと手帳とペアで使っています。



「いつか万年筆を使いこなせる女性になりたい」と思い続けていたところへ、まるで手帳が相棒を呼んだかのようにして私の元へやってきたという、不思議な縁を感じる1本ですね。もう1本は夫がプレゼントしてくれたもので、少し男性的な雰囲気もあるシンプルなデザイン。ウォーターマンを携帯用に使っているのこちらは家に置き、ゆっくりと手紙を書きたいときなどに使っています。

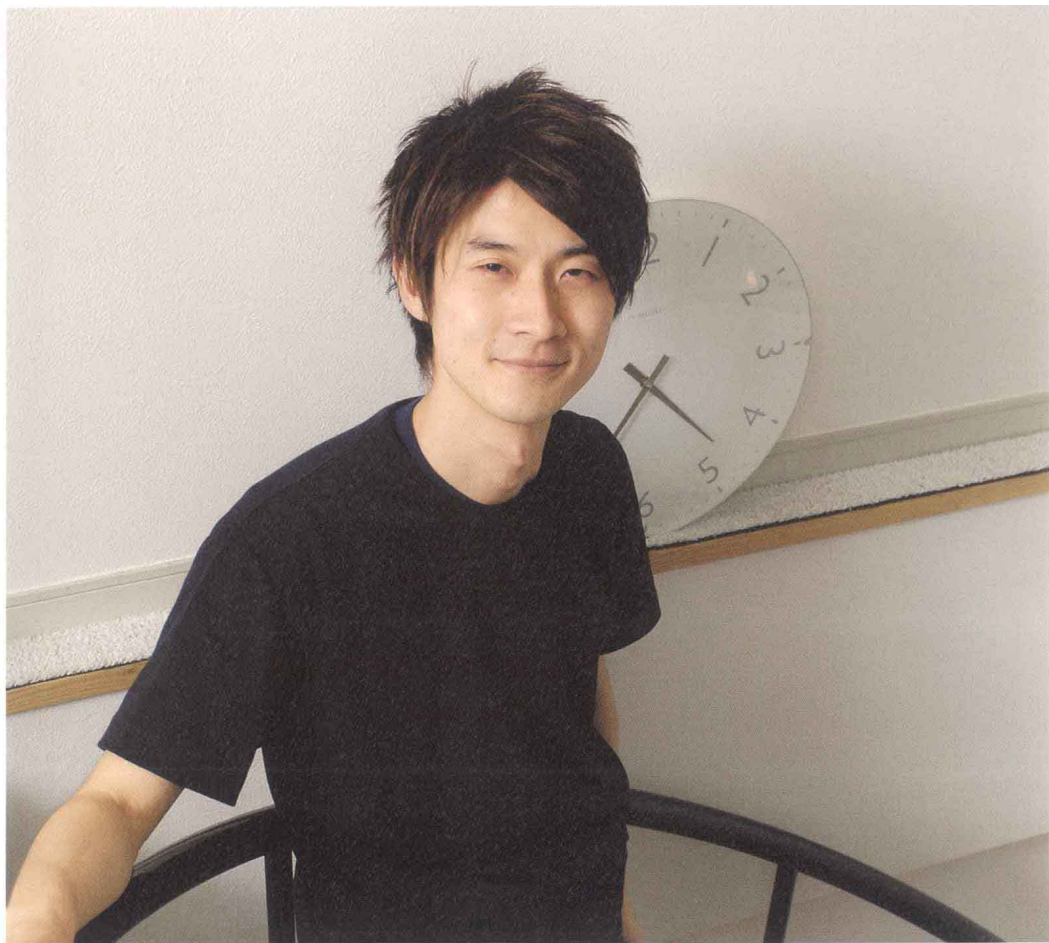
私は“もの”にはそれを使う人を呼ぶ引力のようなものが宿っていると思うんです。ですから、なんとなく肌が合う、手が伸びてしまうという“もの”たちには、愛情を持って大切に接していきたいと思っています。そういう意味では、どちらも人にいただいたものでありながら、この2本には大きな引力を感じますね。

万年筆の出番が一番多いのは、お礼状を書くとき。

文字に温かみが出るので「ありがとう」という気持ちを伝えたいときには、これ以上の筆記具はないという気がしています。また万年筆の文字はそれを書いた人の姿を想像させるので、自分が手紙をもらったときの嬉しさも倍増しますね。脚本家や作家の方から万年筆のお手紙をいただくと、これはお仕事でも使っていられるペンかなとか、ご自宅のデスクで書いてくださったのかなとか、色々なイメージが膨らみます。そんな余韻を楽しめるところも、万年筆ならではの魅力ではないでしょうか。

片岡京子（かたおか・きょうこ）

女優。1971年東京生まれ。青山学院大学文学部日本学科中退。1992年TBS「源氏物語」雲居雁役でデビュー。96年明治座「桜の木は残った」宇乃役で初舞台。2000年新橋演舞場「智恵子飛ぶ」智恵子役を主演。品と透明感がある女優と評価を得る。主に舞台で活躍中。



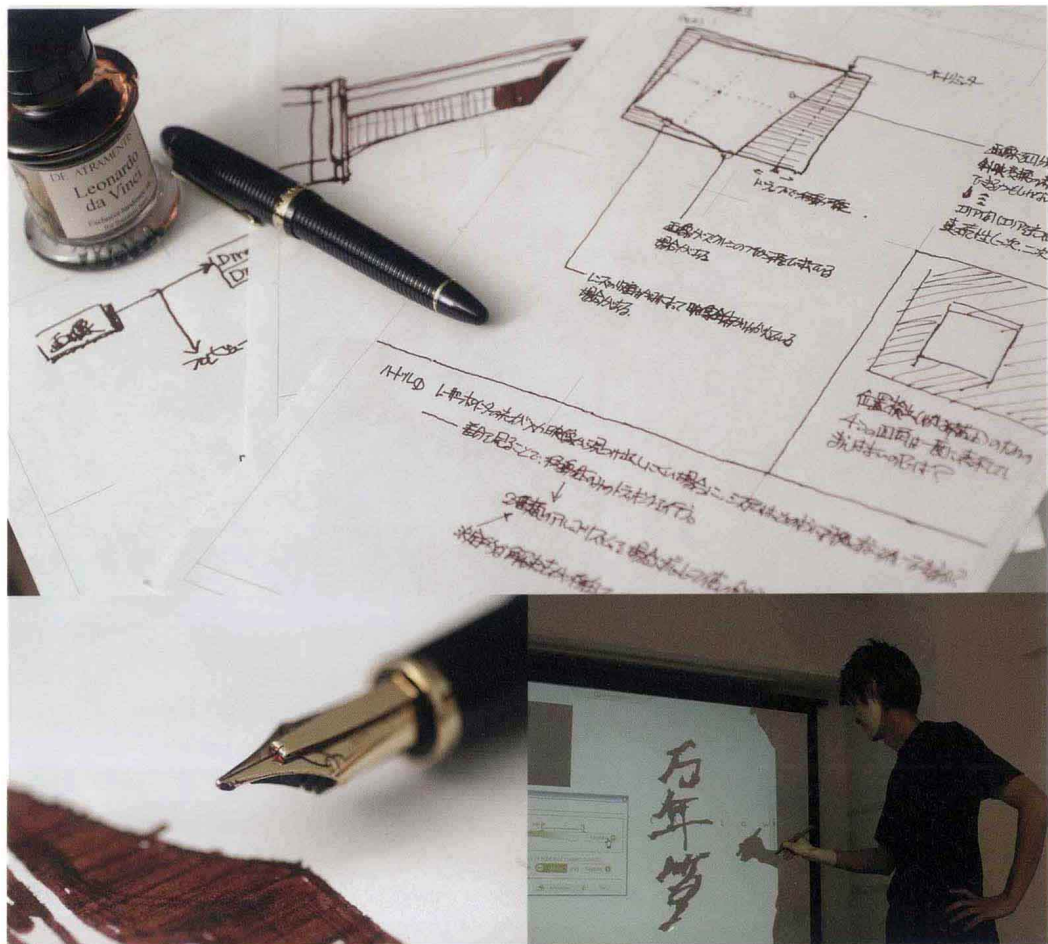
アイデア発生装置

田川 欣哉

“紙に書く”ことの大切さに気付いたのは2年ほど前のことです。僕の世代ではコンピュータを中心に仕事を進めることが多いので、それまでは紙とペンを使って何かをするということの必要性をあまり感じていませんでした。とはいえゼロからアイデアを生み出そうとするときや、頭のなかにある雑多な考えを整理したいときにはどうもコンピュータではやりにくい、そんな風にも思っていたので、あるとき自分専用のアイデアノートを作ってみたんです。そうしたら、これがすごくいい。基本型はタイトル欄の下にノートを9分割するグリッドを作っただけのシンプルなものなんですが、このグリッドのサイズが僕の体に合ったのか、以前よりもずっとスピ

ーディに考えを整理できるようになりました。たぶん紙という有限の物質が、コンピュータのなかでは広がるばかりでまとまりがつかなくなってしまう考えを収束させることに役立っているのだと思います。

僕の字はとても細かいので、最初の頃はこのノートを書くときの筆記具に極細のサインペンを選んでいました。でも、あるとき万年筆についての話を聞く機会があって、その面白さにすっかりハマってしまいました。その頃僕はレーザーポインターを使ってプロジェクターが映し出した画像に文字や絵を書き込む、レーザードロ잉ツールの開発プロジェクトに携わっていたんですが、文字を書く道具を1から作り上げ



というのは実際にやってみるとものすごく大変なことなんです。そういう視点から見ると万年筆というのは実によくできた筆記具なんですが、どこか行き当たりばったりで作られてきたようなところもあって(笑)、知れば知るほど面白い。人の趣味嗜好が強く反映されるという意味では非常に文化的なプロダクトでもあるし、いわゆる“道具”を開発する仕事をしている僕にとっては「これほど懐の深い道具が、果たして自分に作れるだろうか」と、そんなことを考えさせられる存在でした。

いま使っているセーラーの『クロスエンペラー』は、そうしたいきさつから万年筆をもっと探求してみたいと考えて手に入れた1本です。ペン先の構造にとっても興味をそそられたことと、いまの自分のスタイルに“合

っていない”ことが選択の決め手になりました。というのも、このペンは細かい字を書くのには向いていません。つまりオリジナルノートを細かい字で書く僕のスタイルを拒絶しているペンなんです(笑)。でも、だからこそ面白い。細かい字ばかり書いていた僕が大きな字を書くようになれば、コンピュータからアイデアノートへとシフトしたときのような変化が再び起こるかもしれないわけですから。そんな、単に実用的な筆記具にとどまらない幅の広さが、僕にとっての万年筆の最大の魅力です。

田川欣哉(たがわ・きんや)
デザイン・エンジニア。99年東京大学卒業。01年英国 Royal College of Art 修了。リーディング・エッジ・デザインに参加。05年 takram design engineering を設立、デザインとエンジニアリングの両面から製品開発を手がける。



素の自分に戻る瞬間

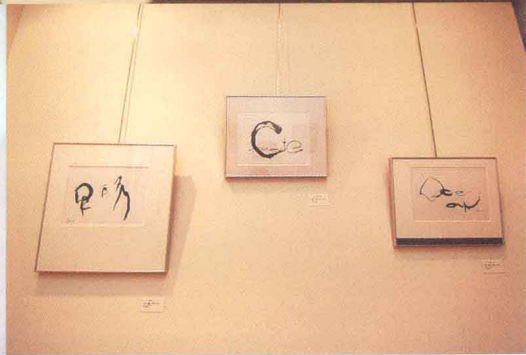
書家の仕事をしていると「文字は生きている」ということを実感する場面によく出会います。昔の“名筆”と呼ばれるものを見ても、長い時間を経たお色褪せない“書き手の思い”が文字のなかに息づいている。だからこそ人に感動を与えられるんですね。ですから私はいつも、造作的な美しさよりも意味やイメージ、そこに込めた自分の思いが伝わるような文字を書きたいと考えながら筆を取ります。

万年筆で書かれた文字にも同じことを感じます。インクの溜まりや筆圧によって表情を変える線など、そこそこに書き手の“気持ち”が表れる。私がまだ学生だった頃、書道の先生がよく使っていたんですよ。万年筆

田中 逸 夫

でさらりと何かを書き留める、そんな姿を目にするたびに「万年筆の文字はどうしてこんなにあったかいんだろう」と思っていました。ボールペンでは出せない味わい、パソコンでタイピングした文字にはない厚みと深み。そんな書き手の人柄や気分までをも伝える力が、万年筆にはあるんじゃないかと思います。

私自身の最初の1本は、大学を卒業するときに母がプレゼントしてくれたモンブラン。当時から手紙を書くときなどに愛用していましたが、書家として仕事を始めてからはリラックスして文字を書くときのための必須アイテムになっています。筆を万年筆に持ち替えると、仕事で張り詰めていた気持ちがすっと和らいで、



自分のなかのスイッチがオンからオフへと切り替わるんです。ですから万年筆で書いたハガキや手紙の文字には“素”の状態の自分自身が表れますね。もともと私は仕事でも文字を形ではなくイメージで表現していくことが多いんですが、万年筆を持つと「文字を書こう」という意識がもつとなくなります。その時々の気分や思いをそのままインクに乗せていくので、そこに表れる文字はまさに“気持ち”そのもの。相手に思いを伝えると同時に、自分自身の心も見つめ直しているような気がします。

最近よく使っているのは、DELTA（デルタ）のトゥアレグ族シリーズの万年筆。私の仕事や人柄をよく知る専門店のオーナーに「私のイメージに合うものを」と言って選んでもらったうちの1本です。深い紺色のボ

ディに綺麗な細工を施してある上品なデザインで、温かみや落ち着きとともに華奢で繊細な雰囲気もあり、使うほどに愛着が湧いてきます。インクはブルー。文字が優しい印象になるので、もっぱらこの色を使っています。

いいものを1本、自分のために。そんな風に考えられるところも他の筆記具にはない魅力ですね。いいものは持っているだけで心が落ち着きますから。でも実際にいいものを持つと、今度は集めたくなる。近頃ではコレクション欲まで出てきてしまって困っています（笑）。

田中逸齋（たなか・いっさい）

Carré Moji（キャレモジ）書家。1977年鹿児島生まれ。大東文化大学文学部中国文学科卒業。高木聖雨氏に師事。若手書家のなかでは傑出した筆力と感性を発揮し、新しい時代を代表するクリエイターとしてマスコミで脚光を浴びている。読売書道展受賞多数。輪墨会主宰。